「国語教育研究」第六十一号（令和二年三月刊）

『宇治拾遺物語』第五五段「薬師寺別当事」の教材化（一）

――〈批判〉について考える学習の教材として――

井上　泰

一　はじめに―教材分析のきっかけ

校外実力テスト、いわゆる模試の問題を見て、高校生にどのような古文理解を求めているのだろうかと思うことがある。例えば、ある模試で、『沙石集』巻九上「浄土房之遁世事」が問題文として出された。長雨によって山が崩れ、浄土房の居る庵が土砂で埋もれてしまったが、浄土房は無事で弟子達は安堵した。しかし、当の本人は命が助かったことを、「あさましき損」と言ったのである。模試では、その「あさましき損」といった理由の説明が求められた。後の文章を読んでいくと、浄土房は、土砂に巻き込まれた時に観音の名号を唱えてしまい助かってしまったが、「南無阿弥仏」と唱えて極楽往生すればよかったと考えていたことが分かる。つまり、浄土房にとって、土砂に巻き込まれたことは、命の危機ではなく、極楽浄土転生への好機だったのである。設問に答えるためには、文語文法の知識を用いながら丁寧に文章を読んでいけばよい。それで正答は得られるのだが、問題は、古文への理解をそれでとどめてよいのかということである。書き手は、末尾に「深く思ひ入りて、この世に心をとどめず、浄土へ参らんと急ぐ心のまことありけるこそ、うらやましく思ゆれ。」と述べ、浄土房の信心深さやこの世に執着せずに浄土を心から望むあり方を賞賛している。仏教言説を知らない学習者や土砂災害の恐ろしさや悲しみを見聞きしている現代の学習者にとっては、話の内容は分かっても、浄土房の言葉やその浄土房を賞賛するテキストの見方・考え方は、理解し難いことであろう。おそらく、これがテストではなく授業であれば、学習者のそのようなテキストへの違和感を聞いたり、問題にしたりして、テキストのものの見方・考え方と対話をしていけるはずである。

とはいえ、現実的には、上述の模試のように、学習者は授業以外の場面でも古文を読む機会がある。そこで、そうした場面でも、学習者が自分でテキストの見方・考え方を理解したり、問題化したりしやすいように、仏教言説に則った語り方を知識として得ておくということも重要だと考えるようになった。そして、実際に仏教的な話題を語るテキストをいくつか教材化し、今年度高校二年生の一学期の「古典」の授業で使っていった。

しかし、そうした中で、教材分析がなかなかうまくいかなかったテキストがあった。それが、『宇治拾遺物語』巻第四ノ三第五五段「薬師寺別当事」である。本話は、薬師寺の別当（寺務を総括する長官）僧都が、生前、寺の米五斗を借りて返さなかったために、臨終の際に火車（地獄の迎え）がやってきて、弟子達の「一石誦経」によって滅罪し、極楽往生を遂げたという話である。話の展開は、市販問題集の基礎問題の問題文として使われるほど平易である。

だが、多くの〈往生〉譚で語られるような往生者の生前の功徳、たとえば、法華経持経や念仏三昧が語られておらず、典型的な〈往生〉譚とは言いがたい面がある。また、実際に授業をした後、学習者が、「別当」が借りた物を「返してん」と言いながらも、弟子達に「一石誦経にせよ」といった点がよく分からないと言って聞きにきた。確かに、物を返さなかった罪に問われているのであれば返せばよいし、実際に「別当」も「その物を返してん」と言っている。新日本古典文学大系の註には、「一石誦経」をしたことについて、「一石を施物とし、誦経を行う意か。（中略―引用者）五斗借用に対し一石を送るのは、利息のような意味合いで、謝罪の気持ちをこめたのであろう。」とあり、授業者もややはっきりとしない感じがあったものの、そのように説明したということもあった。[1]

このように、本話には、〈往生〉譚として読むと不可解な点がいくつかある。それを解決したいと思うとともに、それによってテキストの見方・考え方がもっと明らかになるのであれば、それと学習者とを出会わせて、思索させてみたいと思うようになった。長くなってしまったが、それが本話を分析しようと思ったきっかけである。

二　『日本往生極楽記』との比較

「薬師寺別当事」は、どのような話なのか。今一度、確認しておく。

本話は、薬師寺の別当僧都が、生前、寺の米五斗を借りて返さなかったという寺物私用の罪を犯したために、臨終の際に火車がやってきて堕地獄しそうになったものの、弟子達の「一石誦経」によって滅罪し、極楽往生を遂げたという話である。話の展開を示すと次のようになる。

薬師寺別当　臨終間際に念仏
←
火車の迎え
←
弟子達の一石誦経
←
往生

また、本話は「別当僧都」の話だが、元となったと思われる話が、『日本往生極楽記』に、「僧都済源」のこととしてある。[2]

○『日本往生極楽記』九僧都済源

僧都済源は、心意潔白にして世事に染まず、一生の間念仏を事となせり。命終わるの日、室に香気あり、空に音楽あり。常に乗るところの白馬、跪きてもて涕泣す。米五石を捨てて薬師寺に就

けて、風誦を修せしめ、陳べて曰く、我昔、寺の別当となりしに、借用せしところこれのみ。今終に臨みてもてこれに報ゆるなりといへり。

同様に『日本往生極楽記』の話の展開を示すと次のようになる。

僧都済源　心意潔白にして世事に染まず、一生の間念仏
←
臨終の際に瑞祥
←
米の返納と風誦の命令

瑞祥があったのだから、往生は疑いなく、だから往生の場面は語られないのかもしれないが、本話は米の返納と風誦のことで終わっている。このことから、別当のときに「米五石」を借用したことを自ら思い出し、「報」いたことが本話の主眼と考えられる。

さて、こうした語りと「薬師寺別当事」とを比較すると、薬師寺の別当僧都の寺物私用への意識の低さが明らかとなる。別当僧都は、自らが借りたことを忘れており、さらに地獄の迎えとして来た「鬼ども」に「『さばかりの罪にては地獄に落べきやうなし。』」と言っている。別当僧都にとっては、僅かであったとはいえ、寺物私用の罪は、「さばかりの罪」であり、「地獄に落」ちる罪ではなかったのである。

ここで、一旦、『日本往生極楽記』の済源と『宇治拾遺物語』の別当僧都との主な違いをまとめておく。

●『日本往生極楽記』
・「心意潔白」、「一生の間念仏」の功徳により往生。
・往生直前に、「借用」した米の返納を自ら願う。

●『宇治拾遺物語』
・臨終の際に他念なく念仏。
・地獄の迎えによって、自らの罪に気づく。ただし、罪の重さについては意識が低い。
・弟子達の「誦経」によって滅罪し、往生。

このように、『日本往生極楽記』の済源と比較すると、薬師寺の別当僧都は、往生伝に語られる済源のように、聖人として描かれているようには思われない。むしろ批判されるような点も目に付くのである。

では、テキストは、薬師寺の別当僧都をどう評価しているのだろうか。

三　『今昔物語集』との比較

『日本往生極楽記』などの他に、『今昔物語集』（巻第十五第四話「薬師寺済源僧都往生語」）に、薬師寺の別当僧都「済源」として同様の話がある。その今昔話と比較して、大きく違いがあるのは、「済源」説話として語られているかどうかである。

先に引用した『日本往生極楽記』と同様、『今昔物語集』は、「済源」の〈往生〉譚として語りだしている。冒頭には次のようにある。

○『今昔物語集』「薬師寺済源僧都往生語」冒頭

今昔、薬師寺ニ済源僧都ト云フ人有ケリ。俗姓ハ源ノ氏。幼ニシテ出家、薬師寺ニ住シテ、□ト云フ人ヲ師トシテ法文ヲ学テ、止事無キ学生ト成ヌ。其後、成リ上テ、僧都マデ成テ、此ノ寺ノ別当トテ年来有ルニ、道心並ビ無クシテ、寺ノ別当也ト云ヘドモ、寺ノ物ヲ不仕ズシテ、常ニ念仏ヲ唱ヘテ極楽ニ生レム事ヲ願ヒケリ。

また、話末には、

彼ノ往生ジタル日ハ、康保元年ト云フ年ノ七月ノ五日ノ事也。僧都ノ年八十三也。薬師寺ノ済源僧都ト云フ此レ也、トナム語リ伝ヘタルトヤ。

とあって、『今昔物語集』が、実在の人物「済源」の〈往生〉譚として本話を語っていることが分かる。

小峯和明氏は、固有名詞を語る『今昔物語集』と、それを語らない『宇治拾遺物語』との違いについて、『今昔物語集』は「物語の世界を限定し、想像力の余地を残さない」とし、一方『宇治拾遺物語』は「物語の世界に読者が入りやすい」としている[3]。本話の場合、冒頭と話末に象徴的に見られるように、『今昔物語集』はあくまで「済源」説話として、物語の世界を限定して、本話題を語っている。

では、『宇治拾遺物語』の方はどうだろうか。どのような「物語の世界」が語られ、そこで読者は何に出会うのだろうか。そのことを考えるために、まずは話末に注目したい。本話の話末は、次に示した通りである。

○『宇治拾遺物語』話末

さばかり程の物使ひたるだに火車迎へに来たる。まして寺物を心のままに使ひたる諸寺の別当の地獄の迎へこそ思ひやらるれ。

ここでは、「五斗」という僅かな量の米を使い、火車の迎えがきた薬師寺の別当僧都と、「寺物を心のままに」使っている「諸寺の別当」とが比べられている。本話は、薬師寺の別当僧都の話として語り出されていたが、諸寺の別当の不正を指摘する話末によって、話の焦点が、薬師寺の別当僧都から、「諸寺の別当」へと移行してしまう。また、「寺物を心のままに」使っている「諸寺の別当」との相対として、「さばかり程の物」を使った薬師寺の別当僧都の罪が軽いものに見えてしまう。つまり、話末は、薬師寺の別当僧都の罪障性から目を逸らさせたり、または、罪障を軽く、小さく見えさせたりしようとしているのである。話末は、薬師寺の別当僧都の罪障を隠蔽しようとする語りとでも言えるだろう。

そのことは、『今昔物語集』の語りとの比較を通しても明らかになる。『今昔物語集』は、先に引用した話末の前に、次のような語りを配置している。

此ヲ思ニ、然許ノ程ノ罪ニ依テ火ノ車迎ニ来ル。何ニ況ヤ恣ニ寺物ヲ犯シ仕タラム寺ノ別当ノ罪、思ヒ可遣シ。

内容は、『宇治拾遺物語』とほぼ変わらない。しかし、注目されるのは、「寺物ヲ犯シ仕タラム」（新編日本古典文学全集の訳では、「寺の物を私用するような」。）と、わざわざ「犯シ」という言葉を使っているところである。『宇治拾遺物語』では、「寺物を心のままに使ひたる」と表現され、「犯シ」という言葉が使われていない。「犯」という言葉は、「不犯（ふぼん）」（僧や僧尼が戒律を犯さないこと。）という言葉があるように、仏教上の罪障性を示す言葉でもある。つまり、「寺物ヲ犯シ」という表現は、寺物私用という罪の仏教的な罪障性を際立たせる言い方なのである。そして、そうした言い方を『宇治拾遺物語』はしてない。それはなぜだろうか。なぜ、寺物私用の罪障性を隠すような語り方をしているのだろうか。

その答えは、本話は誰の語りなのかといった問いを考えることで、明らかとなっていく。本話の話題は、生前に犯した罪によって堕地獄しそうになった薬師寺の別当僧都が、弟子達の誦経によって往生したということ。それが、話末によって、諸寺の別当の話になっていく。寺物私用の罪障性を隠しつつ、諸寺別当の罪障性の大きさに焦点をずらしたい人物。それは、薬師寺の別当僧都であろう。「別当はしけれども、ことに寺の物もつかはで、極楽に生れん事をなむ」願っていたものの、いつの間にか、寺物私用という罪を犯してしまっていた別当僧都。僧都は「さばかりの罪」と、寺物私用の罪を低く見積もってはいるが、実際それは堕地獄に値するほどの罪であった。[4] その自分の罪障性を、「寺物」を「犯」すという表現を使わないことによって、また「諸寺の別当」との比較によって、隠蔽しようとしているのだろう。つまり、本話は、薬師寺の別当僧都の視点に立って語られている、または薬師寺の別当僧都自身の語りによって語られているということになろう。

では、なぜそのような語り方を『宇治拾遺物語』の書き手は、採用したのだろうか。答えはいくつか考えられるが、その一つとして、僧都の隠蔽の語りをあえて語ることによって、逆に隠蔽の欲望を読み手に提示するということがあるのではないだろうか。寺物私用という罪だけでなく、その罪を隠したいという欲望、それまでをも、あえて別当僧都の語りによって、僧都の語りを模倣した語り手、または書き手は暴き、告発しているのである。

本話について、新日本古典文学大系註には、次のような説明がある。

寺物の私用を戒める話は、日本霊異記、今昔その他に見え、本書の一一三話（ママ）もその例である。もちろん仏教思想にもとづくもので、例えば、成実論巻八に、負債をそのままにして死ぬと家畜に転生して償わなければならないなどと説かれ、霊異記・中ノ三十一、今昔二十ノ二十二に引用が見える。

註が指摘するように、別当僧都の犯した寺物私用は、仏教思想（教理）にもとづく罪であり、古くから「戒め」られていた罪でもある。そして、本話からもその「戒め」は読み取ることができる。た

だし、本話は寺物私用の「戒め」を語るだけではなく、寺物私用の罪を隠蔽しようとする欲望こそを告発している。その告発は、仏教思想に基づくものではないが、十分に「別当」〈仏教者〉の〈罪〉になるだろう。

このように書き手は、仏教思想による断罪だけでなく、別当という寺務を総括する長官の〈罪〉隠蔽の欲望をも告発している。そこには、書き手の、寺物私用の罪を隠そうとする「別当」への痛烈な批判を読み取ることができる。仏教思想による「戒め」を語るお話ではなく、「別当」の生々しい隠蔽の欲望を提示することで、改めて読者に「別当」の罪障性について考えさせようとしているのだろう。

このように、書き手は、別当の、仏教者の〈罪〉について再考し、それを通して、〈寺院〉や〈仏教者〉のあり方、またはそもそもの〈仏教〉の意味を問い直している。

四　教材化の一例

では、本話はどのように教材化できるだろうか。ここでは、教材化について考えてみたい。

単元のねらいは、「〈批判〉について考える」とした。学習者の認識世界との接点を考えたとき、書き手が問題とした〈仏教者〉の〈罪〉を問題領域としてそのまま設定するのは難しい。そこで、書き手の批判の方法に着目した。書き手は、仏教思想の立場、つまり決められた掟〈ルール〉を破ることを戒めるといった〝外部〟からの批判ではなく、別当の心理、つまり別当の〝内部〟を理解し、そこに見出される隠蔽の欲望を告発している。別当僧都の心理をえぐり出して批判する。こうした〝内部〟への批判について考えさせたい。そこには書き手の人の〈心〉や別当や寺院の実際への理解、また、書き手の仏教者のあり方への思索などが介在していそうである。

また、薬師寺の別当僧都の立場からの語りをあえてとることで、別当僧都の内面性を伝えるという表現方法についても注目させたい。直接的に批判するのではなく、あえて模倣することで、そこに潜む問題を生々しく提示していく表現についても考えていくことができるだろう。

次に、単元構想を示す。時間ではなく、段階〈次〉で示している。

単元名　〈批判〉について考える

第1次　『宇治拾遺物語』「薬師寺別当事」読解。別当僧都は、寺物私用をしないようにしていたが、僅かな借用の未返納の罪によって堕地獄しそうになったこと。また、弟子達の「一石誦経」によって〈往生〉したことが分かるように読む。

第2次　『日本往生極楽記』の「済源」と「別当僧都」とを比較し、〈聖〉性や寺物私用への意識の違いについてまとめ、語り手の「別当僧都」への評価を考える。

第3次　前時の学習を振り返る中で、末尾に注目し、語り手は誰かを、『今昔物語集』と比較しつつ考える。

なお、第一次から第三次までの板書例を挙げておく。注目する言葉や考えたい問いを明示するためである。ただし、問いは、実際には書くかどうかは分からない。また、文法事項や古典的知識は、実際には学習者の理解によって適宜書き込むことになるだろう。

〔第一次〕問い「薬師寺別当僧都」はどのような人？

別当はしけれども、ことに寺の物もつかはで　（逆接・強調）

極楽に生れん事をなむねがひける　（係・強）

（臨終）僧都　念仏

極楽の迎え×→火車（地獄の迎え）

僧都「なにの罪」

鬼ども「寺の物、五斗借りて、いまだ返さねば」

僧都「さばかりの罪」

「とくとく一石誦経にせよ」

弟子　いふままに、誦経にしつ。（鐘のこゑ→火車帰る＝滅罪）

（往生）「極楽のむかへ、今なむおはする」

功徳・大　罪・小

〔第二次〕

『日本往生極楽記』

済源　心意潔白　一生の間念仏

（臨終）香気、音楽、白馬の涕泣　＝　往生のしるし

＋

「今終に臨みてもてこれに報ゆるなり」（借用した米）

意識・強

〈聖〉性　〈

『宇治拾遺物語』

僧都　別当はしけれども、ことに寺の物もつかはで、

＋

（臨終）念仏は他念なく申して

意識・弱

火車←「なにの罪」

五斗私用←「さばかりの罪」

弟子　誦経（滅罪）

問い　語り手は、「僧都」をどう評価しているのだろうか。

〔第三次〕

問い1　誰のお話？

『今昔物語集』

（冒頭）今昔、薬師寺に済源僧都と云ふ人有けり

（末尾）彼の往生じたる日は～

↓「済源僧都」のお話

『宇治拾遺物語』

（冒頭）今は昔、薬師寺の別当僧都といふ人ありけり

主体の変化・ズレ　なぜ？

（末尾）諸寺の別当の地獄の迎へこそ思ひやらるれ

問い2　誰が語っているの？

『宇治拾遺物語』

寺物を心のままに使ひたる

×「犯し」

『今昔物語集』　＊仏教思想を帯びた言葉

恣に寺物を犯し仕たらむ

問い3　焦点をずらしたい人で、寺物私用を「犯」すと表現したくない人は誰？

このように学習を進め、次に示すように展開していく。

第4次　前時の問いの答えを確認し、これまでの学習をまとめる。主に次の二点。

・本話の語り手は「僧都」、または「僧都」の語りを模倣していること。

・「僧都」の語りから、逆に「僧都」の寺物私用の罪を隠蔽したい欲望を読み取ることができること。

また、まとめを踏まえて、『宇治拾遺物語』の批判の方法について評価する。

＊評価を考える際に、なぜその方法が可能だったのかや、どうしてそのような批判をしたのかといった問いを提示して考えさせるという方法もある。

第5次　学習者が評価したものを使い、学習について振り返る。主に次の二点。

・テキストの〈批判〉は、仏教の教えを守らなかった者を戒めるといった外からの批判ではなく、別当僧都の内部への批判であった。このような〈批判〉の違いは、物事への「理解」やあり得べき姿への「思索」などとの関係がある。

＊ここから批判の難しさなどについてもふれる。

・『宇治拾遺物語』の表現方法について。

以上、詳細に示していない点もあるが、教材としての方向性である。

五　おわりに

本稿では、『宇治拾遺物語』第五五段「薬師寺別当事」を分析し、その分析を踏まえて教材化について考えてきた。分析については、『日本往生極楽記』や『今昔物語集』との比較を通して、本話が、仏教思想をもとにした戒めの話ではなく、「別当僧都」の語りをなぞることで、罪隠蔽の欲望を告発する語りであることを指摘した。また、それを踏まえた教材化では、テキストの〈批判〉の方法に着目した構想を示した。テキストの方法について考えることで、〈批判〉に介在している物事への理解の有無や深浅、またあり得べき姿への思索などについて考えることができ、学習者の「〈批判〉について」の思索を深めることができると考えた。分析についても、また教材化の仕方についても、他の方法も考えられそうだが、それらは今後の課題としたい。また、教材化のきっかけは、テキスト分析の困難さと実際の授業での使用であったが、本稿では、実践を報告できなかった。それについても、今後の実践の中で行えれば、別稿で報告したい。なお、『宇治拾遺物語』は前後段との連接による表現が指摘されている。[5] その点についても、稿を改めて考えてみたい。

〔付記〕

本稿は、第六〇回広島大学教育学部国語教育学会での発表を元にしたものである。発表の際には、広島大学大学院生　高橋龍之介氏、奈良女子大学附属中等教育学校　井浪真吾氏に、ご質問及びご助言を頂いた。特に井浪氏のご指摘を受けることで、『宇治拾遺物語』を再考することができ、本稿をまとめることができた。両氏に対して、この場を借りて、厚く御礼申しあげる。

注

1　この問題については、授業後いくつかの仏教説話を調べてみた。すると、『今昔物語集』巻第二十第二十二話「紀伊国名草郡人造悪業受牛身語」において、人の物を借用して返さなかった人が牛になり、その牛に対して、寺僧「浄達」が「誦経ヲ行」ったという話があった。やはり「誦経」には滅罪の意味があることがわかったので、そのように理解している。

2　他には、次のようなテキストに往生譚がみえる。

○『日本紀略』後篇四村上天皇　康保元年七月五日条
五日戊寅。少僧都濟源卒。有往生極樂之瑞。

○『僧綱補任』天徳四年
權少僧都濟源四月五日入滅。（七十六。）三論宗 薬師寺別當。東大寺義延弟子。　傳云。一生間念佛爲事。臨終日。異香滿室。音樂聞空。又捨米五百於藥師寺。修誦經。爲彼寺別當時用之。仍報之云云。

○『元亨釈書』巻第十感進四之二
釋濟源。學三論于藥師寺延義。兼修念佛三昧。康保元年四月五日以米五石捨藥師寺看讀經文。謂徒曰。天慶七年我被旨主藥師寺務者六年。其間我用常住者五石而已。今日當終故償之耳。既而異香奇樂響天滿室須臾而滅。

3　小峯和明『宇治拾遺物語の表現時空』（若草書房、一九九九年。

一四五頁〜一四六頁。）

まず、語彙からみると、落差がめだつのは固有名詞である。

（中略）

最後の4は例外的に『宇治拾遺物語』も詳しくなっているが、大半はほかのように簡略で、さほど人物や場所に関心をみせない。一方、『今昔物語集』は実にきめ細かく紹介し、不明の場合は空格にしてまで固有名詞の記載にこだわっている。これを国東論では「史実的公的な記録風の性格」とする。『日本霊異記』や『将門記』『陸奥話記』などの漢文テキストに対しては逆に年時を省略する例が多く、テキスト全体の特質とまでいえるかどうかはおいて、すくなくともそのような実録をめざしていたことは認めてよかろう。欠字にしてまで固有名詞を書こうとした姿勢が著しく、『今昔物語集』では固有名詞はもはや記号の次元を越えていた節がある。その結果、物語の世界を限定し、想像力の余地を残さない、きわめて硬質な枠づけがなされた、といえる。

他方、『宇治拾遺物語』はほとんどそうした指向がなく、むしろ人名はたんなる符牒にすぎず、物語の世界に読者が入りやすい。

（傍線は引用者）

4　『今昔物語集』巻第二十「延興寺僧恵勝依悪業受牛身語第二十」には、恵勝という僧が、寺の薪一束を取って人に与え、返さずに死んでしまい、牛に生まれ変わったという話の話末に、「人此れを以て知るべし、一塵の物なりといふとも、借用せし物をば慥かに返すべきなり。返さずして死ぬれば、必ず畜生と成りて、此れを償のふなり、となむ語り伝へたるとや。」（カタカナは平仮名に改めた。）とある。やはり、寺物私用の罪は、僅かであっても重罪になるのである。

5　『宇治拾遺物語』の表現について、竹村信治氏は、次のように述べている。

『宇治拾遺物語』の表現は読みを操る言述とともにある。特に前後話との連接は、いわゆる〝連想〟〝連纂〟の域を越え、新たな意味の生成を促す仕掛けとして用意されており、〝編述〟とも呼ぶべきものとなっている。語りへの感度と既有知識をもってこの編述を読み解くところにこそ『宇治拾遺物語』の「知」の形＝世界への眼差しは姿を現し、〝伝統的な言語文化〟の真正な理解への途も拓かれる。となれば、『宇治拾遺物語』の学習は教科書採録譚に前後章段を加え、また、テキストが賦活を求める関連（前提）知識を用意して、その言述、編述を読み明かすかたちで構想されなければならない。（竹村信治「教材発掘　宇治拾遺物語―序文を読む―」、『国語教育研究』五七号、広島大学教育学部国語教育会、二〇一六年三月）

（広島大学附属福山中・高等学校）